

廃校の危機を救う為！
生徒会長が権力者のおしさんに性接待！？

ひくっ

うあ...

会長！
陵辱待ったなし！

モジ...

ぐゅ

ぐゅ！

ぐゅー

基本8枚
セリフ無し差分、サイズ差分込みの全120枚構成。

とある一室、私は少女に『接待』をさせていた。
当の彼女は渋々、嫌々といった様子。
中年のペ○スを弄って喜ぶ少女など、少数派だろうが……。

んっ……
さわ……

少女の名前は角○杏。
廃校が決まったとある学校の生徒会長だ。
なんとか廃校を取りやめてもらい、学校を救おうとして、
私のような権力者に接待をしているというわけだ。

ぐき
ぐき

ぴくっ

うあ...

だって、こんな、したことない.....ですし

もじ...

ぺ○スを出し、手に触れる瞬間、
あまりの興奮に激しく勃起してしまったものだが、
手コキの経験はないようで、正直あまり気持ちよくない。
たどたどしい手つきは結構だが、刺激が少なすぎる。

少し緊張をほぐしてもらおうと、
敬語は止めてもらうことにする。
少女とは長い付き合いになるだろうし、
くだけた口調のほうが「らしい」と思ってしまったから。

「では、口でしてもらおうかな」
簡潔に指示を突きつけると、少女は一瞬体を固くする。
学校を救う為には拒否できないことがわかっていているからだ。
ぺ○スを弄っていた手が少し止まり、肩に力が入っている。

ひっ...っ!

え...あの、その、手でやるだけじゃ、
だ、だめ？ だめ、だよね、やっぱり

あまり気持ちよくさせていないのが自分でもわかっていたのか、
もっとエスカレートした行為を要求されるのを、覚悟していたようだ。

ビクッ

むわ...

少女を跪かせると、顔が股間に近づき、思わず腰が浮きかけてしまう。少女を急かすように、ほら、と私は語りかける。



さすがに手コキをするより、フ○ラの方が断然嫌悪感強いだろう。それが伝わってくるから、たまらないのだ。

こちらを見上げ、ペ〇スに舌を伸ばしはじめる。
これでいいの?と確認するような、怒っているような、
そういった目で、訴えかけてくる。

ゾク

...ロッ

ヒッ
ク
ッ

ううう.....はあ、はあ、
れる.....んっ

あまりの気持ちよさに、我慢汁が垂れ、
舌に糸を引き始める。
嫌々フ〇ラをさせる征服感が、射精感を高めている。

うえ……………!!
えうう……………!!
ま、まだ……………? まだ続けないと、だめ?

匂いと味に拒否反応が出たのか、顔をしかめ、えづきはじめる。少女にとつては中年のペ○スを舐めさせられるなど、屈辱でたまらないだろう。

トロッ

ハア…
ハア

はあ、はあ、こんな、年下の女の子に、
な、舐めさせるなんて……………
はあ……………はあ、うう

文句ばかりいってると、いつまで経っても終わらない。
私の態度からそう感じたのか、
少女は諦めたように一心不乱にペ○スを刺激しはじめる。
その顔には、自らが汚れても学校を救ってみせるという、
決意を感じ取れた。

ビクッ

ピクッー

.....
んっ...おえっ

んっ...んっ...んっ...
はあ、はあ。

少し強気な顔を汚したくなっちゃった。
私は予告なく、少女の顔めがけて、欲望を吐き出し、
精液で汚していく。

思わず目を背ける少女。
その顔は驚きと、汚されてしまったことによる
悲しさ、悔しさにあふれていた。



うあっ!! やめて、よ!
そんな、顔、汚さないで、かけないで.....!

もちろんこれだけではまだ満足していない。
私は今日、少女の体の中まで支配しようと思っていたのだ。
今までののはあくまで前座。
少女を所有物として扱うように、ベッドへ押し倒す。
もちろん、処女を奪い、その小さい体に、
中年の精液を注ぎ込むためである。

ひっつっ!! あの、さ、
やっぱり、こんな、こんななのっ……

ひっ…!!

精液で汚れたペ○スを股間に押し付ける。
すぐに挿入してしまいたいが、
少しだけ少女の反応を楽しんでみる。

はあ、はあ……いや、いいや、覚悟は、
うん、できてるし……ひひと思いに、やっちゃってよ

学校の為、精一杯の強がりを見せる。
私はその表情が苦痛に歪むのを見たくて、
ゆっくりとペ○スを押し込んでいった。

グ
ッ
ッ



はいっつ………これ、い、痛………
んうっ………

ああ……っ

あっ………!!
んうっ………!!
くっ………

ぐいぐいと、容赦なく少女の奥へと
ぺ○スを侵入させていく。少女の奥へと
何かを貫いたようなかすかな感触の後、
一筋の赤い雫がうっすらと垂れてくる。

ズッ
ズッ

ぐっ
ぐっ
ぐっ

処女を失った実感が湧いてきたのか、
悲しそうに体を震わせる。
もちろん、痛みのせいというのもあるだろうが。

いっ……

うう………あ、これ、
まだ、終わらないの、痛い、痛いんだよ、ホントに

早く終わらせてほしいとのことなので、
期待に応えることにする。
私も、少女の膣の圧迫感に慣れてきて、
少し激しく動いてみたくなったのだ。

ヌン

レ

気持ちよくなってきたかと少女に聞くと、
キッと目を逸らし、拒絶の意を示す。
まだ少し、反抗的な気持ちが残っているようだ。

はあ、はあ……………ご、こんなの、
全然、気持ちよくなんでないし、
大したこと……………ないっ。
うう……………

その反抗的な態度を改めさせてやろう。
私は無許可で膣内射精してやろうと、
より強く、子宮口を押しつぶすように、
ペ○スをゆっくり、じゅくりと突き入れる。

ビクッ

ずっ

ポン

あつ……………えっ？
あつっっ！！ウソっ！ あうう！
や、やだる。なんで中に……………！

射精しはじめて少し経つと、
中出しされたのがわかったのか、
苦悶の表情を浮かべて身をよじる。
外に出してもらえと思っていただけののだろうか。

はう……………気持ち悪い。
中に、おじさんの、熱いのが、こんなに……………
妊娠、しちゃったなら、どうすんの……………

あまりの快感に少し頭がぼうつとしていた。
少女の言葉はあまり私には届かず、
次はどうやって辱めてやろうかと思案していた。

どっぴゅ！！
どっぴゅ！！

今日も夜に少女を部屋に呼び出す。
制服姿にも興奮するが、趣向をこらして着替えてもらう。

……今日は何、すればいいんですか

警戒心からか、敬語に戻ってしまっている。
そこをたしなめつつ、本日来てもらおう『服』を目の前に差し出す。



こん………は、はあっ!?

はあっ!?

こ、こんな、こんなの3枚渡されても、その……
ええ………!?

そう、手渡したのは、絆創膏。
まだ未成熟な少女の体に、似合うと思ったのだ。
少し偏った性癖だが、私はこれが好きなのである。

君が貼りたいところに貼ればいい。
まあ、場所は決まりきっているようなものだし、
性行為を行うのだから1枚はすぐに剥がしてしまおうけれど。



くっ.....!!
でも、そんな.....うう

可愛らしい顔が羞恥に歪む。
服を脱ぎ、絆創膏を自らの恥部に貼り付けるといふ行為自体が、
耐え難い屈辱なのかもしれない。
私はそこをじつくりと眺め、視姦してやりたい気持ちもあった。

……………んっ

言われた通りに絆創膏を『着て』
ベッドの上に横たわる。
幸い、乳首、乳輪は大きい方ではないようなので、
小さな絆創膏でもある程度隠せているようだ。

はあ……はあ、こんなの、
バカみたい……

ピクッ

ぐき
ぐき

きゅん

✓

ゆっくりと眺めていると、
もう私のペ○スは爆発しそうなほど膨張していた。
こらえきれず、少女の下の口へと吸い込まれていく。

あん！くうっ！！
うううう！！ また、ゴムもしないで……

そんなもの、するわけがないだろう。
せっかく肌と肌と触れ合い、お互いの液体で濡れ、汚れることができるのに。
スキンの存在など、無粋極まりない。

ぬちゃ

ズッポ
ン

はあうっ!!
 やっ!!
 やあ!
 んっ、んっぱり、きつい、って!
 いたあ……!!

まだやはり慣れていないのか、顔が苦痛で歪んでいる。
胸に貼られた絆創膏も心もとなく、見えそうで見えないというのがたまらない。
正直なところ、はつきり見えてしまっているより、興奮度が高い。

うぐっ!! はあう……………あぐっ!!
だから、そんな奥に、ぶつけ、ないで……………ってば

ぬいぐるみ

少女の声が、反応が、私のペ○スを激しく射精へ導く。
妊娠させてしまおうと、男の本能のまま、行動している。

んー!! はあっ!! ああ!!
ああう!! やめて、やめてっ!! やっぱりこれ、やだよ!!

ああ...

泣き叫び、嫌がる彼女の表情を楽しみながら、
私はまだペ○スを押し込んだまま、ゆっくりと時間が流れるのを待った。
少女の嗚咽を聴きながら、長く、余韻に浸っていた。

うう……み、みんな、私、がんばってるから。
学校、なんとか、してみせるから、さ。

グン...

どぐん

ビュッ

スクール水着を着てもらった。
年相応な感じがよく似合っている。
身体に触れ、手触りも確かめてみたが、
思ったよりすべすべとしていて、柔らかな感触だ。

ぴくっ

……………はい。
着たけど、これで満足？

そん………あうー……
そんな「……」……

ぬちゅ



ズン

ビクッ

はうっ!!

スクール水着の布越しの、
うっすらと浮かび上がっている胸に、
私はペ○スを押しつけていった。
ガマン汁を刷り込むようにして。
予想以上に刺激が強く、射精感を抑えきれそうにない。

ひゃうっ！… ええ、こ、これで……？
そ、そんな、ええ……？

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ひゃう！！

自分でも驚くべき量を射精してしまった。
少女の顔まで汚してしまふ。
青々とした水着が、白濁液で濡れ、汚れていくのが、
何よりも気持ち良かった。

お尻をこちらへ向けさせ、
バックで挿入する体勢をとる。
布地をずらすと、赤みがかった可愛らしい入り口と、
きゅっと引き締まった尻肉が眼前にあらわれた。

んっ...

ポン

プン

キエ

恥ずかしくて声も出ないようだ。
こちらから表情は伺えないが、
悔しそうな顔をしているに違いない。
私は気にせず、後ろからペ○スを突き入れていく。

あんどつっつ!!
いっ……

っっ!!

少しずつ奥に入っていく。
奥へ奥へといくたびに、ツインテールが
左右に揺れるのが子ウサギのようで愛らしい。
バックでのセ○クスは、動物のように乱暴をしている気分だ。

ピンピン

クチュ♡

ヌズン

んっ！あうっ！あうっ！
……フー……！！

うっ！！

腰を動かすスピードをあげていく。
○スの先が子宮口にぶつかるたび、
早く射精してやらないと、という気持ちになる。
先ほど射精したばかりだが、
この身体の気持ちよさに、もう耐えきれそうにない。

ズブッ

ぬるっ！

私はうめき声をあげ、少女の奥へと目一杯射精した。
腰を震わせながら、ぺ○スを押し込んだまま、
しばらくの間、精液を流し込み続けた。

ひゅっ...!

ああ.....んっ、また、中に。
こ、こんなに、出してるし.....!!
だ、出しすぎ、だから、絶対.....!

抵抗できずに恨み言をぶつぶつとつぶやいている。
今は何を言われても構わない。
どうあっても、この状況で征服してる側は、私なのだから。

ドクン

イク

イク

私は平目に、少女を呼び出していた。
彼女は会長だ。大事な用事があるといえは、
容易に抜け出せるであろう権力は持っている。

はあ……はあ、
こ、こんなので、いくなんて、む、無理

んう…
れろ

ぴん

クダ
ヌチン

ピン

呼び出しておいて、やらせているのは、
男のモノを舌で愛撫しながら、自らを慰める……。
俗に言う、フ○ラ○オ○ニーだ。
ただ、あまり上手くないかないうで、
切なそうな顔でペ○スを舐めるだけの行為となっている。

これだけで絶頂できるように開発していきたい。
私は少女を自分色に染めることに幸福を感じるのだ。
不安そうな顔で見上げてくるが、その顔を見ただけで、
色々な少女開発計画が頭に浮かんでくる。

うう...

あの……ここまでしてるんだから、
廃校の件、もう少し待っててください。
なんとか、してください……。

少女には使命がある。
自分と、友人が愛する学校を守るという使命が。
その使命に少しだけ協力してやるだけで、
少女の身体を弄ぶことができるのだ。
これから私も、少女を汚していくだろう。
その為に私も、少女の廃校阻止に協力していくのだ……。

もよ



完